



TITLE:

ハイデッガーの關心論 (特別號)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. ハイデッガーの關心論 (特別號). 經濟論叢 1928, 26(1): 22-55

ISSUE DATE:

1928-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128785>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 一 第 卷六十二第

行發日一月一年三和昭

特 別 號

法人に關する重複課税の問題 . . . 法學博士 神戸 正雄

ハイデッガーの關心論 . . . 文學博士 米田庄太郎

動物界の道德 . . . 理學士 川村多實二

長崎貿易に於ける銅及銀の支那輸出に就いて . . . 文學博士 矢野 仁一

型について . . . 法學士 恒 藤 恭

アダム「富國民論」の研究對象并に方法の基本的考察 . . . 法學士 石川 興二

奥羽諸藩における赤子養育仕法 . . . 經濟學博士 本庄榮治郎

自作農地の創設及維持 . . . 法學博士 河田 嗣郎

專賣類似の仕法に基く百姓一揆 . . . 經濟學士 黑 正 巖

ハイデッガーの關心論

米田庄太郎

余は本雜誌昨年十月號の拙稿「ハイデッガーの關心論の基礎」に於て、先づ同氏の解釋現象學の一般的概念、及び同氏が「現實在の準備的基本分析」と稱するものの第一章から第六章までの大要を述べたが、本稿に於ては其の第六章即ち最後の章「現實在の實在としての關心」(Die Sorge als Sein des Daseins)の大要を述べて、以て同氏の關心論の一般と、それが同氏の哲學上に有する意義の一般を明かにすることとする。

一 現實在の構造全體の根源的全體性の問題

さきに述べし處によりて知られる如く、世界內在 (Das In-der-Welt-sein) は根源的に又常に「一」の全體構造である。然らば此の構造全體の全體性は理論存在的本體論的に如何に規定される可きか。

それさきに述べし如く、現實在は事實的に存在する。かくて理論存在性 (Existentialität) と事實性 (Faktizität) との本體論的統一、或は事實性が理論存在性に本質的に從屬すると云ふことが、問題となる。現實在はそれに本質的に屬するその具情在性 (Befindlichkeit) に基いて「一」の實在仕方を有し、其の實在仕方に於てそれがそれ自身に現はれ、そうしてその被投入性 (Geworfenheit) に於て開示される。然るに被投入性は「一」の實在者、即ち常にその諸可能性其者であり、かくてそれは其等の諸可能性の中に、又其等の諸可能性から、自からを了解する處の(其等の諸可能性に基いて自から設計する處の)「一」の實在者の實在仕方である。直近在者 (das Zubandene) に於ける實在、並に「他」その共實在 (das Mitsein mit Anderen) が、共に同等根源的

に屬する世界内在は、常にそれ自身の爲めにあるのである。併し其のそれ自身は最初に又多くは非固有的で、即ち「人間それ自身」(das Men-Selbst)である。世界内在は常に離落或は墮落(verfallen)して居る。かくて現實在の平均的日常性は墮落して開示され、投入されて設計する世界内在(「世界」)に於けるその實在に於ても、亦「他」との共實在に於ても、その最固有の實在可能(das eigenste Sein-Können) 其者が肝要である處の世界内在)として、規定され得るのである。

然らば現實在の日常性の此の構造全體は、その全體性に於て果して把握し得られるものであるか。現實在の實在は、其の實在からして、さきに述べし諸構造の本質的同等根源性が、(其等の諸構造に屬する理論存在的變容諸可能性と共に)了解され得る様に統一的に明示され得るであらうか。吾々が今企だてる理論存在的分析論の準備的考察の地盤に於て、現實在の實在を現象的に獲得する途があるであらうか。

先づ構造全體の全體性は、諸要素の組み合わせによりて現象的に把握する可きでない。次に本體論的に充分なる手引きは、體驗の内在的知覺に缺けて居る。更に現實在の實在は、人間の理念(eine Idee des Menschen)から演繹する可きでない。そうして是れまでに述べし現實在の解釋によれば、實在了解(Seinsverständnis)は現實在の本體論的構造に、本來具有されて居るので、現實在は實在しつゝその實在に於て、それ自身に開示されて居る。具情在性(Befindlichkeit)と了解すること(Verstehen)とは、此の被開示性の實在仕方を構成するのである。然らば現實在が勝れたる仕方に於てそれ自身に開示されて居る處の、一の了解する具情在性(eine verachtende Befindlichkeit)は、現實在の中に存するものであるか。

現實在の理論存在的分析論が、その基本的本體論的機能に就て原則的明亮を保持す可くは、それはその豫備的任務を果す爲めに、即ち現實在の實在を闡明する爲めに、現實在其者の中に存する處の最も深大な、又最もも根源的な開示諸可能性の一を探索せねばならぬ。そうして現實在が自からをそれ自身に現はす開示の仕方は、その仕方に於て現實在其者が一定の仕方に於て單純化されて、接近し得られるが如きものであらねばならぬ。かくて其仕方に於て開示されたるものを以て、求められたる現實在の實在の構造全體性は、根本的に闡明されねばならぬ。

今此處に吾々は右の方法的要求を充たす一の具情在性として、氣遣ひ或は心配或は惴々(die Angst)の現象を、吾々の分析

の第一の問題とするのであるが、此の根本的性情在性の精練、及びそれに於て開示されたるものゝあるがまゝの本體論的特性論は、離落或は墮落の現象から出發し、そうして先づ惱みをそれと同類なる恐怖の現象から區別する。惱みは現實在の實在可能性として、それに於て開示されたる現實在共者と共に、現實在の根源的實在全體性の判明なる把握に對して、現象的地盤を與へる。そうして坭實在の關心(*die Sorge*)として露はにされる。此の關心と云ふ理論存在的根本現象の本體論的精練は、最初には關心と同一視されるかも知れない諸現象に對して、明かに限定されることを要する。かゝる諸現象とは意志、願望、性向及び衝動(*Hang und Drang*)などである。關心は其等の現象から引き出されることは出来ない。是れ其等の諸現象は關心に於て基づけられて居るからである。

關心としての現實在の本體論的解釋は、各本體論的分析の如く、それが獲得するものに於て、本體論的實在了解、或は實在者の本體論的認知に接近し得られるものから、遠ざかつて居る。本體論的に認識されたるものが、通常了解に對して、それに只本體的にのみ知られて居るものから見て、怪しく見えると云ふことは敢て驚くに足らぬ。そうではあるが、關心としての現實在の、此處に探求されたる本體論的解釋の本體的胚珠も亦既に、論理的に工夫されたるものの様に見えるかも知れない。それゝ關心として現實在の理論存在的解釋の本體論的的確證が必要である。そうして其の確證は、現實在がそれ自身に就て言明せる以上、早くから既に關心として、只本體論的であるが、白からを解釋して居たと云ふ證據に於て與へられて居るのである。

却説關心の現象にまで進入せる現實在の分析論は、基本的本體論的問題、即ち實在一般の意味の問題の研究の準備となる可きである。既に獲得されたるものから、一の理論存在の先天的人間學の特殊問題に明かに眼光を投ずる爲めには、指導的な實在問題と最も密接に聯絡する諸現象を顧みて、更に一層深く之を把握せねばならぬ。そうして其等の諸現象と云ふは、先づ現實在的でない特性の世界内的實在者を規定する直近在性(*Zahandenheit*)、現存性(*Vorhandenheit*)である。從來本體論的問題研究は實在を第一次的に現存性(即ち現實性 "*Realität*"、世界現實性 "*Welt=Wirklichkeit*")の意味にて了解し、そうして現實在の實在を規定せずに放棄して置いたから、此處に關心、世界性、直近在性及び現存性(現實性)の本體論的聯絡の論究が必要となる。そうして此の論究は現實性の概念の一層鋭き規定(此の理念に於て方向附けられたる、現實論及び觀念論の認識論的問題設

定に結び附けて）に導くのである。

實在者はそれが依て以て開示され、露はにされ、且つ規定される經驗認知及び把握から獨立して居る。併し實在は只一定の實在者、その實在に實在了解の如き或物が屬する處の實在者、即ち現實在の了解することに於てのみ「實在する」。されば實在は理解されずにはあり得るが、併し完全に了解されずにあることは決してない。本體論的問題研究に於ては、昔から實在と眞理とは全然同一視されては居なかつたとしても、密接に結び附けられて居た。そうして此の點に於て、實在と了解との必然的聯絡は、假令根源的理山に於ては隠くされて居たとは云へ、明かに指示されて居る。かくて實在問題の充分なる準備の爲めには、眞理の現象の本體論的闡明が必要である。そうして此の闡明は、被開示性及び被露出性(Erschlossenheit und Entdecktheit)、解釋及び言表等の諸現象に關して、さきに下せる解釋が獲得せるものの地盤に於て、先づ遂成されるのである。

されば現實在の準備的基本分析論の終結か、其の主題として論究す可きものは左の如くである。即ち現實在の一の著しき被開示性としての惱みの根本具情在性。關心としての現實在の實在。現實在の本體論的自已解釋から、關心としての現實在の理論存在的解釋の確證。現實在、世界性及び現實性。現實在、被開示性及び眞理。

二 現實在の一の著しき被開示性としての 惱みの根本具情在性

現實在の一の實在可能性は、實在者としての現實在それ自身に關して、本體的啓示を與ふ可きである。そうして此の啓示は只現實在に屬する被開示性(具情在性及び了解することに基づく處の)に於てのみ可能である。然らば惱みは如何程まで、一の著しき具情在性であるか。惱みに於て開示されたる實在者があるがまゝで、現象的に規定され得る様に、又は此の規定が充分に準備され得る様に、現實在は如何にして惱みに於て、それ自身の實在によりてそれ自身に現はれるか。

此處に吾々は構造全體の全體性の實在に進入せんとする企圖に於て、離落或は墮落 (das Verfallen) の分析を出發點とするが、今「人間」(das Man) 及び配慮されたる「世界」に於ける没入は、固有な自己實在可能 (Selbstsein-können) として、それ自身の前からの、現實在の逃避の如き或物を開示する。併しそれ自身からの、又その固有性からの此の現實在の逃避の現象は、是れからの研究に對する現象的地盤として役立つ資格を有すること、最も少なきものの如くに見える。此の逃避に於ては、實に現實在はそれ自身の前にそれ自身を持ち出さないのである。此の反轉は墮落の最固有の傾向に應じて、現實在からあらへ導くのである。併しかゝる現象に於ては、吾々の研究は本體的存在的特性附けを、本體論的理論存在的解釋と混交しない様に、又は前者に於て存する處の、後者に對する積極的な基礎を看過しない様に、注意しなければならぬ。

墮落に於ては、存在的には實に自己實在の固有性は閉され、抑しのけられて居る。併し此の閉塞は只、現實的には現實在の逃避はそれ自身からの逃避であると云ふ事に於て餘はれる處の、一の被開示性の喪失に外ならぬ。逃避を起させるものの前に於て、現實在はまさしくその「後に」に隠れる。併し只現實在がそれに屬する被開示性によりて、本體論的に本質的にそれ自身の前に持ち出された以上に於てのみ、それ自身の前から逃避し得るのである。云ふまでもなく此の墮落する反轉に於ては、逃避を起させるものは把握されて居ない。併しそれからの反轉に於て、「其所」(da) が開示されて居る。存在的本體的な反轉は逃避を起させるものを、あるがまゝに理論存在的本體論的に把握する可能性を、その被開示性特性に基いて現象的に與へる。反轉中に存する本體的「からあらへ」の中に、逃避を起させるものが、現象學的に解釋する「進行」(それに向いて行くこと) に於て、了解され且つ概念的に理解され得るのである。

されば吾々の分析を墮落の現象に於て方向附けることは、それに於て開示されたる現實在に就て或物を本體論的に學ぶ望みを、原則的に始めから無効に歸せしめるのでない。否之れに反して、解釋はまさしく此處で、現實在の人工的自己把握に引き渡されること、最も少ないのである。此處で解釋は只、現實在が自から本體的に開示するものゝ解明を遂行するだけである。そうして一の具情在的に了解することの中に、解釋しつゝ共に行き且つ追ふて行くことに於て、現實在の實在に進入する可能性は、方法的に開示する具情在性として作用する現象が根源的であるほど、愈々高まるのである。然らば惱み (die Angst) はかゝ

る役目を演ずるものであるか。

さきに具情在性を究明するに當つて、恐怖を例として考察したが、今悩みは明かに恐怖と現象的親縁を有するものにして、兩者は屢々混同されて居る。されば此處に先づ兩者の差別を究明することは、悩みの本質を解する爲めに肝要である。

それ「人間」及び配慮されたる「世界」に於ける現實在の墮落を、吾々はそれ自身の前からの一の「逃避」と稱したが、併し「の前からの」各退却、「からの」各反轉は、必ずしも逃避であるのではない。恐怖が開示するもの或は脅かすものから、恐怖に基づいて行はれる退却は、逃避の特性を有する。具情在性としての恐怖の解釋は、恐怖を起させるものは常に一の世界內的な、一定の場所から、近づき来る有害な實在者にして、現實在の外に存立し得るものであることを示す。然るに墮落に於ては現實在がそれ自身から反轉或は退却するのである。此の退却を起させるものは、一般的に脅嚇の特性を有しなければならぬ。併しそれは退却する實在者の實在仕方を有する實在者、即ち現實者それ自身である。此の退却を起させるものは、「恐ろしきもの」として把握され得ない。是れ恐ろしきものは常に世界內的實在者として遭遇するからである。「恐れられ」、又恐怖に於て露はにされる脅嚇は、只常に世界內的實在者からのみ来る。

されば墮落の反轉は、世界內的實在者に對する恐怖に基づけられたる逃避では、決してない。墮落の反轉は寧ろ悩みに基づくものにして、そうして悩みによりて恐怖が始めて可能となるのである。かくて悩みは恐怖よりも一層根源的である。

今それ自身の前からの、現實在の墮落する逃避と云ふことを了解する爲めには、世界内在は現實在の基本組織であることを憶ひ起さねばならぬ。悩みを起させるものはあるがまゝの世界内在である。然らば悩みが其の前に悩むものは、恐怖が其の前に恐怖するものから、現象的に如何に區別されるか。悩みが其の前に悩むもの、即ち悩みを起させるものは、決して世界内の實在者でない。さればそれは世界内の實在者と本質的に全く委屬關係(Bewandnis)を有しない。此處では脅嚇は一定の有害性の特性(一の特殊的な事實的實在可能に基いて、一定の關係に於て、脅かされたるものに適中する處の)を有しない。悩みを起させるものは全く規定されて居ない。そうして此の不規定性は、常に如何なる世界内の實在者が脅かすかを事實上決定せずに置くのみならず、更に一般的に世界内の實在者は關係ないことを意味する。世界内に直近在し現存する何物も、悩みが其の前に悩むものとして作用しない。此處では直近在者及び現存者が世界内に露はにされる委屬性全體は、あるがまゝでは一般的に重要でない。

されば又悩みは脅かすものが近づき來る一定の「此處」及び「彼所」を「見」ない。脅かすものが何處にも存しないと云ふことが、悩みを起させるもの、特性である。悩みは、それが其の前に悩む處のものが何であるかを「知らない」。併し「何處にもない」と云ふことは無を意味するのではなくして、その中に本質的に空間的な内在に對する、場所一般、世界の被開示性一般が存するの

である。されば脅かすものは近所内の一定の方向から近づき得ない。之れは既に「其所」にある、しかも何處にもあるのでない。それは押し詰め、息を塞くほど近くあるので、しかも何處にもあるのでない。此の押しつめるものは、此の又はかの現存者でも、亦總計としての一切の現存者でもなく、直近在者一般の可能性、即ち世界其者である。然るに世界は本體論的には、世界内在としての現實在の實在に、本質的に屬するものである。かくて悩みが其の前に悩むものは、即ち世界内在其者である。悩みは具情在性の様相として先づ第一に、世界を世界として根源的に又直接に開示する。但し此の事は悩みに於て、世界の世界性が理解されると云ふことを意味するでない。

却説悩みは只或物の前に於ての悩みであるだけでなく、更に具情在性として同時に或物の爲めの悩みである。併し悩みが爲めに悩むものは現實在の一定の實在仕方及び可能性でない。悩みが爲めに悩むものは、世界内在其者である。悩みは「世界」及び公共的に擴められてあることから、墮落しつゝ己を了解する可能性を、現實在より奪ひ去る。悩みは現實在を、それが爲めに悩むもの、その固有の世界内在可能に押し戻す。悩みは現實在を、その最固有の世界内在（了解するものとして本質的に、諸可能性に於て自から設計する）に於て別離する。されば自から爲めに悩むものに於て悩みは現實在を可能的であることとして（實に只それ自身によりてのみ別離さ

れたるものとして、別離に於てあり得るものとして）開示する。

惱みは現實在に於て、最固有の實在可能に於ての實在、即ち自から己れを選択し把握する自由の爲めの自由實在を露はにする。惱みは現實在をその自由實在の前に、即ちそれが常にある處の可能性としてのその實在の前に、持ち來る。併し此の實在は同時に、現實在が世界内在として引き渡されて居る處のものである。

惱みが爲めに悩むものは、惱が其の前に悩むもの、即ち世界内在として露はれる。そうして惱みが其の前に悩むものと、惱みが爲めに悩むものとの同一性は、自から悩むことにさへ擴められる。是れ自から悩むことは具情在性として、世界内在の一の基本仕方であるからである。開示すること、開示されたものとの理論存在の同一性、かくて後者に於て世界としての世界、即ち別離せる、純粹な、投入されたる實在可能としての内在が、開示されて居ると云ふことは、悩みの現象に於て、一の著しき具情在性が解釋の主題となつて居ることを覺らせる。悩みは別離し、かくて現實在を「獨自」として開示する。併し此の理論存在的「獨自論」(“Solipsismus”)は決して一の孤立せる主觀物を、一の無世界的出現の素直な空虚の中に移し入れるのではなく、只現實在をまさしく一の極端なる意味にて、世界としてのその世界の前に、かくて世界内在としてのそれ自身の前に、持ち出すだけである。

悩みは根本具情在性として、右の如き仕方にて開示すると云ふことに對しては、ヤハリ日常の現實在解釋及び言説は、最も公平なる證據である。具情在性はさきに述べし如く、「人が如何にあるか」を露はにするのであるが、悩みに於ては人は「氣味惡い」(‘unheimlich’)のである。そうして此の氣味惡さに於て、現實在が悩みを起させられるもの、固有の不規定性(或は茫漠性)、即ち「何物でもなく、何處にも存しない」と云ふことが、先づ第一に現はれる。併し此の場合に氣味惡さは同時に氣樂でなうこと、「不氣樂」(das Nichtzuhaussein)を意味する。さきに現實在の根本組織の最初の現象的告示、及び「内側性」の純樸的意義から區別された内在の理論存在の意味の闡明に於て、内在は「に住むこと」、「を熟知すること」として規定され、そうして内在の此の特性は「人間」の日常的公共性、即ち安心せる自己安全性、自明的な氣樂さを現實在の平均的日常性に齎らす處のものによりて、一層具體的に明かにされたが、今之れに反して悩みは現實在を「世界」に於けるその墮落的投入から呼び戻すのである。此處に日常的熟知或は信頼は自から失なはれ、そうして現實在は別離されて居る、しかも世界内在として別離されて居る。内在は「不氣樂」の理論存在の様相に入り来る。そうして「氣味悪い」と云ふ言説はつまり之を意味するに外ならぬ。

以上述べ來りし處によりて、今や離落或は墮落は逃避として何物の前から逃避するのであるかは、現象的に明かになる。それは世界內的實在者の前から逃避するのではなくして、まさしく世界內的實在(配慮することが「人間」中に没入して、安心せる熟知或は信頼に於て滞在し得る實在者としての世界內的實在者)の方へ逃避するのである。そうして公共性の氣樂さの中への此の墮落する逃避は、つまり投入されたる世界内在としての現實在中に存する不氣樂即ち氣味惡さの前から、逃避するのである。此の氣味惡さは間斷なく現實在を追ひ驅け、「人間」に於ける現實在の日常的投入を、あらはにではないけれども、常に脅かす。併し此の脅嚇は日常的配慮の完全なる

安全性及び不缺乏性と事實上相伴なふことが出来る。悩みは最も無害なる状態に上ることが出来る。又悩みは普通に人が氣味悪くなり易き暗黒を要しない。暗黒に於ては殊に著しき仕方にて「何物」も見られない。併しそれが爲めに暗黒に於ては、世界は一層強く「其處」にある。

吾々は理論存在の本體論的に、現實在の氣味悪さを、現實在が自からそれ自身に加へる脅嚇として解釋するとも、それによりて氣味悪さは事實的悩みに於ても、常に此の意味にて了解されて居ると主張するのではない。現實在が氣味悪さを了解する日常的仕方は、墮落しつつ、不氣樂を眩ます反轉である。されど此の逃避の日常性は、現象的には左の事を示す。即ち悩みは根本具情在性として、世界内在の本質的現實在組織に屬すると云ふことである。安心し信賴する或は熟知する世界内在は、現實在の氣味悪さの一樣相であるので、決して其の逆でない。かくて不氣樂は理論存在の本體論的には、一層根源的な現象として理解されねばならぬ。そうして只悩みが潜在的に世界内在を常に規定するが故にのみ、世界内在は「世界」に於て配慮する具情在的實在として、恐怖し得るのである。されば恐怖は「世界」に於て墮落せる、非固有的な、そうしてあるがまゝのそれ自身に隠くされたる悩みである。

されば事實的には氣味悪さの氣分は、多くは存在的に了解されずに残る。加之「固有な」悩みは、墮落及び公共性の優勢の下では稀れてある。悩みは屢々「生理的」に制約されて居る。此の事實はそれの事實性に於て、一の本體論的問題である。そうして悩

みの生理的誘發或は解放は、只現實がその實在の根本に於て、自から惱むが故にのみ可能である。

固有の惱みの存在的事實よりも一層稀れなるは、此の現象をその原則的な理論存在の本體論的構成及び機能に於て解釋せんとする企だてである。そうして其の理由は一部分は現實在の理論存在的分析論一般が忽かせにされて居ること、殊に具情在性の現象が誤解されて居ることに存する。さはれ惱み現象の事實的に稀れであることは、理論存在的分析論に對して一の原則的方法的機能を行なふ資格を、それから奪ひ去ることが出来ない。否な之に反して、惱み現象の稀れなることは、現實在〔人間〕の公的顯示によりて、その固有性に於ては多くはそれ自身に隠くされて居る處の〕が此の根本具情在性に於て、一の根源的な意味で開示し得られると云ふ事に對する一の指標である。

何れの具情在性も、全き世界内在をその一切の構成的諸契機〔世界、内在、自己〕に従ふて開示するものであるが、併し惱みに於ては一の勝れたる開示の可能性が存する。是れ惱みは現實在を別離するからである。此の別離化は現實在をその墮落から呼び戻し、その實在の諸可能性として、固有性及び非固有性をそれに隣はす。常に吾のである處の現實在の此等の根本諸可能性は、彼等自身に於ての如く惱みに於て、世界內的實在者〔現實在が最初に又大抵は固着する處の〕によりて全く假裝されずに、自から現はれるのである。

今惱みに關する上述の理論存在的解釋によりて、現實在の構造全體の全體性の實在を尋ねる指導的問題の答解に對して、如何程まで現象的地盤が獲得されたか。

三 關心としての現實在の實在

構造全體の全體性を本體論的に把握せんとする企圖に於て、吾々が先づ第一に呈出せねばならぬ問題は左の如きものである。即ち惱みの現象及びそれに於て開示されたるものは、全體性を探究する洞察が此の所與に於て成就され得る様に、現實在の全體を現象的に同等根源的に與へ得るかと云ふことである。今惱みの中に存するもの、總體を形式的に列舉すると左の如くである。

即ち自から悩むことは真情在性として世界内在の一樣相であること、悩みが其の前に悩むものは投入されたる世界内在であること、悩みが爲めに悩むものは世界内在可能であること。かくて悩みの全現象は、現實在を事實的に存在する世界内在として示す。そうして現實在の基本本體論的諸特性は理論存在性、事實性及び離落或は墮落してあること等である。併し此等の理論存在的諸規定は、諸部分として一の複合體に屬し、其の複合體に於て其等の諸規定の一が時に缺けることがあり得ると云ふが如きものでなく、其等の諸規定間に一の根源的聯結が存立し、それによりて構造全體の求められたる全體性が決定されるのである。かくて現實在の其等の實在諸規定の統一に於て、あるがまゝの現實在の實在が本體論的に把握し得られることとなる。然らば此の統一其者は如何に特性附けらる可きか。

それ現實在はその實在に於て其の實在其者に關係する實在者である。そうして此の「關係する」と云ふことは、了解することの實在組織に於て、最固有の實在可能の爲めに自から設計する實在として、さきに釋明されたのであるが、此の實在可能はそれが爲めにつまり現實在が、それがあるが如くに常にある處のものである。現實在はその實在に於て、常にそれ自身の一の可能性と結合して居る。そうして最固有の實在可能に對する、隨ふて固有性及び非固有性の可能性に對する自由實在(自由であること)は、悩みに於て一の根源的元素的具體化に於て現はれる。然るに最固有の實在可能の爲めの實在とは、本體論的には、現實在はその實在に於て、それ自身に對して既に「豫め」(“vorweg”)あることを意味する。現實在は常に「それ自身を越へて」ある。但しそれでない實在者に對する態度としてではなく、それ自身である處の實在可能に對する實在と

してゐる。そして本質的な「關係すること」の此の實在構造を、吾々は「現實在の自己豫在」(das Sich-vorweg-sein des Daseins) として把握する。

却説此の構造は現實在組織の全體に當てはまるものにして、自己豫在は一の無世界的「主觀」に於ける一の孤立せる傾向の如きものを意味するのではなく、世界内在を特性附けるものである。今それ自身に引き渡され、既に一の世界中に投入されて居ると云ふことは、世界内在の本質性にして、そうして之を一層完全に把握すると、「一の世界の中に既に在ること」に於ける自己豫在」(Sich-vorweg-im-schon-sein-in-einer-Welt) を意味する。此の本質的に統一的なる構造が、現象的に洞視されるに於ては、さきに世界性の分析に於て引き出されたるものは、又直ちに釋明される。世界性の分析に於ては、世界性が構成される意味性の指定全體は、一の「或物の爲め」に固着して居ることが明かにされた。併し指定全體、「する爲め」の多様な諸關係を、現實在が爲めに關係する處のものと結び附けることは、決して一の主觀と諸客觀の一の現存的世界との溶接を意味するのではない。此の結び附けは寧ろ、その全體性が今や明白に、「の中に既に在ること」に於ける豫在」そして露はになれる現實在の、根源的全體組織の現象的表現である。換言すれば、存在することは常に事實的なものである。理論存在性は本質的に、事實性によりて規定されて居るのである。

尙ほ現實在の事實的に存在することは、只一般的及び無關心的に、一の投入されたる世界内在可能であるに過ぎないものでなく、更に配慮されたる世界中に常に没入して居る。そうして此の「に於て墮落する實在」に於て、明らかに又は暗にか、了解されてか又は了解されずにか、氣味悪さ（人間の公共性が一切の不熟知、不親密を抑壓するが故に、多くは潜在的憐みを以て覆はれて居る處の氣味悪さ）からの逃避が告示されて居る。「一の世界中に自から豫め既に在ること」の中に、配慮されたる世界内在の直近在者に於て墮落する實在が、一緒に含まれて居る。

されば現實在の本體論的構造全體の形式的理論存在的全體性は、左の構造に於て把握されねばならぬ。即ち現實在の實在は（世界内在に遭遇する實在者）「に於ける實在」として（世界中）「に自から豫め既に在ること」を意味すると云ふことである。そうして此の實在は、純本體論的理論的存在的に用ひられる「關心」(Sorge)と云ふ語の意義を充たすのである。但し此の意義から、心配とか又は無心配とか云ふが如き、本體的に意味される實在傾向は、總て排除されて居る。

今世界内在は本質的に關心であるが故に、さきの分析に於て直近在者に於ける實在は、就ての關心即ち配慮 (Besorgen) として、又世界内在に遭遇する「他」の共現實在と交はる實在は、對しての關心即ち世話すること (Fürsorge) として、把握されることが出来たのである。「に於ける實在」が配慮であるのは、是れ此の實在は「内在」の様相として、内在の基本構造即ち關心によりて規定されて居るからである。關心は只事實性及び墮落から切り離されたる理論存在性を特性附けるだけでなく、更に此等の實在諸規定を統一的に包括する。されば關心は又第一次的に且つ排他的に、それ自身に對する吾の孤立せる關係を意味するもので

ない。就ての關心即ち配慮、及び對しての關心即ち世話に倣ふて造られる「自己關心」と云ふ語は、重複語であらう。關心は自己との一の特殊關係を意味し得ない。是れ自己は本體論的には既に自己豫在によりて特性附けられて居るのであるが、然るに此の規定に於て、關心の他の二つの構造契機、即ち「内の豫在」及び「に於ける實在」が、一纏に設定されて居るからである。

さきに述べし處によりて知られる如く、最固有の實在可能の爲めの實在としての自己豫在に於て、固有の理論存在的諸可能性に對する自由實在(自由であること)の可能性の理論存在的本體論的條件が存する。實在可能は現實在が事實上あるが如くに、爲めに常にある處のものである。然るに此の實在可能の爲めの實在は自由によりて規定される以上、現實在は又その諸可能性に對して無志向的にも振舞ひ得る。現實在は非固有的であり得るし、又事實上最初に且つ大抵は、此の様相に於てある。そして固有の「現實在が爲めにある處のもの」は把握されずに止まり、現實在それ自身の實在可能の設計は「人間」の處理に委されて居る。されば自己豫在に於ては、「自己」(Selbst)と云ふことは當面には「人間」自身の意味での「自身」(Sichselbst)を意味する。非固有性に於ても亦、現實在が本質的に自己豫在であることは變らない。それはそれ自身の前からの現實在の墮落的逃避が、ヤハリ現實在はそれの實在に關係すると云ふ實在組織を示すのと同様である。

關心は根源的構造全體性として理論存在の先天的に、現實在の各事實的「態度」及び「立場」の「先きに」、即ち既に其の中に存する。されば關心と云ふ現象は決して、理論的態度に對する實際的態度の優位を言表するものでない。一の現存者の只直觀するだけの規定も、政治的活動や又は休養的娛樂などと同様に、關心の特性を有するのである。「理論」も「實際」も共に、その實在が關心として規定されねばならぬ一の實在者の實在可能性である。

されば關心の現象を其の本質的に不分割的な全體性に於て、意欲及び願望、又は衝迫及び性向の如き特殊な作用或は衝動に還元せんとする企だては、或は其等のものを結合して關心を構成せんとする企だても亦、失敗するのである。

意欲及び願望(Wollen und Wünschen)は本體論的には、關心としての現實在に於て必然的に其の根柢を有するものにして、その實在の意味に於ては全く茫漠たる一の「流れ」の中に出現する、本體論的に冷淡なる單なる體驗ではない。此の事は衝迫及び性向に就ても同様である。此等のものも、現實在に於て一般的に純粹に表示し得られる以上、關心に基いて居るのである。

關心は本體論的には右に擧げし諸現象よりも「より早き」ものである。併し此處に吾々の企だてる基本本體論的研究（現實在の完全なる本體論を展開せんとするのでも、亦一の具體的人間學を論述せんとするのでもない處の）にありては、其等の現象は理論存在的に如何に關心に基いて居るかを指示するだけで、吾々は満足せねばならぬ。

現實在が爲めにある處の實在可能は、それ自身世界内在の實在仕方である。かくて實在可能の中に、本體論的には世界内在的實在者との關係が存するのである。關心は常に配慮及び世話である。そうして意欲に於ては、一の了解されたる、即ちその可能性に於て設計されたる實在者が、配慮さる可きものとして、又は世話によりてその實在に持ち來らる可きものとして、擧まれて居る。されば意欲には常に一の意欲されたるもの（既に一の「爲め」から規定されて居るもの）が屬する。意欲の本體論的可能性を構成するものは、「爲め」一般の豫めの被開示性（自己豫在）、配慮され得るもの、開示性（既に實在することが中に在る處のものとしての世界）、及び「意欲」されたる實在者の一の可能性の爲めの一の實在可能に於ける現實在の了解する自己設計である。かくて意欲の現象に於て、根柢に存する關心の全體性が洞見されるのである。

現實在の了解する自己設計は、事實的なものとしては既に一の歸はにされたる世界に於てある。それは此の世界から、又先づ「人間」の啓示されて居ることに従ふて、その諸可能性を捕へる。此の啓示或は解釋は始めから選擇自由な諸可能性を、熟知されたるもの、到達し得るもの、擔ひ得るもの即ち適當するもの、範圍に限つて仕舞ふ。そうして現實在諸可能性をかくの如くに、日常的に先づ自由に處理し得られるものに引き均らすことは、同時にあるがまゝの可能的なるものに對して盲目ならしめる。配慮の平均的日常性は可能性には盲目となり、只「現實的」なるものに於て安靜する。併し此の安靜は配慮の活動の膨脹を禁止するのでなく、之を喚起する。此の際には積極的に新しき可能性は意欲されないが、併し自由に處理され得るものは、假象が生起し、或物が起る様な仕方にて、「巧妙に」變化される。

きはれ「人間」の指導の下に安靜する「意欲」は、實在可能の爲めの實在の消滅を意味しないので、只其の一變容を意味するだけである。そうして此の際に、諸可能性の爲めの實在は、多くは單なる願望として現はれる。願望に於ては現實在は、配慮に於ては、常に把握されずに居るだけでなく、實現されようとは思はれも亦期待されもしない諸可能性に於て、その實在を設計す

る。

然るに單なる願望の様相に於ける自己豫在の優勢は、事實的諸可能性の不了解を自から齎らす。此の際にその世界が第一次的に願望世界として設計されて居る世界内在は、己れを支持することが出来ないうで、自由に處理し得られるものに於て没入するが、しかも此の自由に處理し得られるものは、願望されたるものゝ光に照らせば、決して唯一の直近在者として充足するものではない。願望は了解する自己設計の一の理論存在的變容にして、被投入性に墮落して居て、尙ほ専ら諸可能性を渴望するものである。かゝる渴望は諸可能性を閉ぢる。願望する渴望に於て、「其所」にある處のものは、「現實的世界」となる。要するに願望は、本體論的には關心を前定するのである。

渴望に於ては「に於て既に在ること」が優位を占める。そうして「の中に既に在ること」に於ける自己豫在は、それに應じて變容されて居る。墮落する渴望は、現實在が常に其の中にある世界に依て「生か」されんとする現實在の性向或は傾向を露けにする。性向或は傾向は「を志さず或は狙ふ」と云ふ特性を有する。自己豫在は一の「に於て常に既に在ること」の中に没入して居る。性向の此の「其の方」(「Hinzu」)は、性向が渴望する處のものによりて引キ寄せられることである。現實在が云はゞ一の性向中に沈む時には、只一の性向が現存して居ると云ふだけでなく、關心の完全なる構造が變容されて居る。此處に現實在は盲目となつて、一切の可能性を其の性向に隷屬させる。

然るに「生きんとする」衝迫は、それ自身から誘因或は衝動を伴ふてくる一の「其の方」(「Hinzu」)である。それは「如何なる代價を拂ふても突進せんとする其の方」である。衝迫は他の諸可能性を押し除けようとする。此處にも亦自己豫在は一の非固有的なるものである。(假令衝迫の襲撃は衝迫するもの其者から來るとするも)衝迫は當面の具情在性及び了解することを蹂躪することが出来る。併し現實在は決して、支配及び指導の他の諸態度が時々附け加はる處の、「單なる衝迫」ではない。それは完全なる世界内在の變容として、常に關心である。

純粹なる衝迫に於ては、關心はまだ自由になつて居ない。但し關心は現實在がそれ自身から壓迫されることを始めて可能ならしめるものであるが。そうして性向に於ては關心は常に束縛されて居る。性向と衝迫とは、現實在の被投入性に根ざす可能性で

ある。「生きんとする」衝迫は絶滅さる可きものでなく、「生かされん」とする性向は根絶さる可きものでない。併し兩者は本體論的には關心に基づくが故に、又只そうであるが故にのみ、關心によりて本體的存在的に變容さる可きである。

關心と云ふ語は、一の理論存在の本體的基本現象（その構造に於ては單純なるものでないが）を意味する。關心構造の

本體論的に元素的なる全體性は、一の本體的根元素に還元され得ない。是れ實在が實在者から「説明」され得ないのと同様である。終りに至らば、實在一般の理念は現實在の實在と同様に、單純なるものでないことが示されるであらう。關心が「に於ける實在」としての「自己豫在」として規定されることは、此の現象も亦それ自身に於て、ヤハリ構造的に複合的なものであることを明らかに示す。そうして此の事はつまり、關心の構造多様性の統一及び全體性を本體論的に擔ふ處の、更に一層根源的な一の現象を究明する爲めに、本體論的問題が更に押し進められねばならぬと云ふことを指示するのである。併し此の問題の探究に進むに先だち、實在の意味一般の基本本體論的問題に就て是れまでに解釋されたるものを、回顧的に且つシツカリ掴むことが肝要である。尚ほ先づ第一に、此の解釋の本體論的に新しきものは、本體的に甚だ古いものであることが示さる可きである。關心としての現實在の實在の解明は、現實在の實在を一の工夫されたる理念の下に押し込むものでなく、本體的存在的に既に開示されたるものを、本體論的理論存在的に概念に持ち上げるのである。

ハイデッガー氏は夫れよりさきに述べし如くに、關心としての現實在の理論存在的解釋を、現實在の本體論的自已啓示或は解釋から確證せんとして居るのであるが、紙面の都合上此處に之を省略することを省略する。更に同氏は夫れより、是れまでに究明し得たるものに基いて、實在の意味の問題を詳しく精練せんとして、ヤハリさきに述べし如く、「現實在、世界性及び現實性」の關係、並に「現實在、被開示性及び眞理」の關係を論究し、以て實在の意味の問題とは嚴密には如何なるものであるか、又如何なる方面よりその研究に進む可きかを明かにして、同氏が「現實在の準備的基本分析論」と稱するものを終了して居るのである。併しヤハリ紙面の都合によりて此處では其の一般を述べるに止める。

四 現實在、世界性及び現實性

さきに述べし如く從來本體論に於ては、實在は一般的に現實性 (Realist) の意味に解せられ、現實在もヤハリ他の實在者と同じく現實的に現存する (real vorhanden) として把握されて居た。併し是れまでに論述せる處によりて明かなる如く、實在一般を現實性の意味に解するに於ては、現實在の眞實なる理論存在的分析論が正當に達成され得ないのみならず、世界內的直近在者の實在を正當に洞見することも出来ないのである。要するに現實性は種々なる實在仕方中の一に過ぎないものにして、更に本體論的には現實在、世界及び直近在性と一定の基づけ聯結 (Fundierungs-zusammenhang) に於て存立するものである。そうして此の事を證論するには、現實性問題を根本的に深く論究するを要する。此處に之を左の三問題に大別して考察する。a) 「外界」の實在及び證

明可能性の問題として現實性、(b)本體論的問題としての現實性、(c)現實性と關心。

(a)「外界」の實在及び證明可能性の問題として現實性

從來の哲學に於ては、外界の實在とは外界の現存性を意味するものと解せられ、隨ふて外界の實在の證明可能性とは、外界の現存性の證明可能性を意味するものと解されて居た。併し現實性分析論に於て吾々が是れまでに究明せる處によりて見れば、右の如き意味に解されたる「現實性問題」は一の不可能なる問題である。是れつまり此の問題に於て主題となつて居る實在者其者は、かゝる問題呈出を云はゞ拒絶するからである。吾人は「外界」は現存すること、又如何に現存するかを證明せんとす可きでなく、何故に世界内在としての現實性は、「外界」を先づ「認識論的」に空虚中に埋め、然る後に始めて之を證明せんとする傾向を有するかを、啓示或は表示せんとす可きである。要するに吾人は先づ、現實性問題を只「認識論的」にのみ解決せんとする企圖に於て、暗に前定されて居るものをよく探究し、そうして此の問題はつまり一の本體論的問題として、現實性分析論に引き戻されねばならぬことを覺ることが、甚だ肝要である。

(b)本體論問題としての現實性

現實性とは世界內的に現存する實在者の實在を意味するものとすれば、此の實在様相の分析に於ては、世界內的實在者は只世界内性 (die Innerweltlichkeit) の現象が解明された時にのみ、本

體論的に理解する可きものであることは明かである。然るに世界内性の現象は世界の現象に基づき、そうして世界の現象は世界内在の本質的構造契機として、現實在の基本組織に屬し、更に世界内在は關心として特性附けられたる現實在の實在の、構造全體性中に含まれて居るのである。されば右の關係或は聯結によりて、現實性の分析を始めて可能ならしめる基礎及び視界が指示され、そうして又此の聯結に於て、現實性の自體の特性が始めて本體論的に了解し得られるのである。

右の見解から考へると、デイルタイ及びシェラーの現實性解釋は不徹底であることが疊られる。彼等の重要視する抵抗經驗即ち抵抗するものゝ抗爭的に露はれることは、本體論的には只世界の被開示性に基いてのみ可能である。抵抗性は世界内的實在者の實在を特性附けるが、それは事實的に只、世界内的に遭遇する實在者の露はれる範圍及び方向を規定するだけである。抵抗經驗の總計が始めて世界の開示に導くのでなく、却つて之を前定して居るので、「反抗」や「對抗」は其の本體論的可能性に於ては、開示されたる世界内在によりて據はれて居るのである。

抵抗は又それ自身の爲めに現はれる一の衝動或は意志に於て、經驗されるのでない。此等の衝動或は意志は、關心の變容として現はれるのである。只此の實在仕方の實在者のみが、世界内的なるものとしての抵抗するものに、打突かり得る。されば現實性は抵抗性によりて規定されて居るならば、此處に注目す可き二つのものがある。一はそれによりて現實性は、實在の種々なる特性中の一として認められると云ふこと、二は抵抗性に對しては、必然的に既に開示されたる世界が前定されて居ると云ふことである。抵抗は世界内的實在者の意味に於て「外界」を特性附けるが、併し決して世界の意味に於て特性附けるのでない。現實性意識はそれ自身世界内在の一樣式である。一切の「外界問題」は、必然的に此の理論存在的基本現象に歸着するのである。

(c) 現實性と關心

今現實性は本體論的名辭としては、世界內的實在者に結び附いて居る。それは世界內的實在者の實在仕方を一般的に表示し、そうして直近在性及び現存性は現實性の様相として作用する。併し現實性と云ふ語に、その傳來の意義を認めるならば、此の語は純粹な物現存性 (die pure Dingvorhandenheit) の意味にて實在を意味する。しかも各現存性は物現存性でない。吾人を「包む」自然は世界內的實在者であるが、併し「自然物性」(die Naturdinglichkeit) の仕方に於て、直近在者の實在仕方を表はすのでも、亦現存者の實在仕方を表はすのでもない。そうして「自然」の此の實在は如何に解釋されることも、世界內的實在者の一切の實在様相は、本體論的には世界の世界性に、隨つて世界內在の現象に基づいて居る。それよりして左の洞見が生ずる。即ち現實性は世界內的實在者の實在諸様相間に於て、特に優位を占めるものでなければ、又世界及び現實在の如きものを、本體論的に適當に特性附けることも出来ない。

現實性は本體論的基づけ聯結、及び可能的な範疇的並に理論存在的證示の範圍に於ては、關心の現象に還元されたが、併し現實性は本體論的には現實在の實在に基づくこと云ふことは、現實的なもの (Reales) は、只現實在が存在するに於て、又存在する限りに於てのみ、それが夫れ自身に於てあるものとしてあり得ると云ふことを、意味し得ない。

云ふまでもなく、只現實在がある以上、即ち實在了解の本體的可能性が存する以上、其處に實在が「ある」(“es gibt”)のである。現實在が存在しなければ、其の場合には「獨立性」も「ある」のではなく、又「自體」も「ある」のでない。其の場合にはかゝるものは了解し得られるのでも、亦了解し得られないのでもない。又世界的實在者も露はにされ得なければ、隠れて居ることも出来な
い。又實在者があるとも亦あらぬとも云ひ得られない。實在了解があり、隨ふて現存性の了解がある限りに於て、此處に實在者は更にあるであらうと、云ひ得られるのである。

右に示されたる處の、實在(實在者でない)は實在了解に依存すると云ふこと、即ち現實性(現實的なもの Realen でない)は關心に依存すると云ふことは、更に進んで行はれる現實在分析論を、不批判的な、併し又しても又しても吾人を襲ふ處の、現實性の理念を手引きとする現實在の解釋に陥ることから、吾々を保護するのである。只本體論的に積極的に解釋されたる理論存在性に於て方向附けることのみが、「意識」や「生命」の分析の事實的進行中、如何なる意味の現實性も其の根柢に置かれることがない云ふ保證を、與へるのである。

現實在の實在仕方を有する實在者は、現實性及び實體性 (Realität und Substantialität) から理解され得ないと云ふことは、さきに論述せる主張即ち人間の實體は存在であると云ふことによりて明かにされた。されど關心としての理論存在性の解釋、及び之を現實性から判然區別すること

は、理論存在的分析論の終局を意味するものではないので、それは只實在並にその可能的諸様相に關する、又かゝる諸變容の意味に關する問題に於ける問題錯綜を、一層鋭く表示するだけである。要するに只實在了解がある時にのみ、實在者は實在者として接近し得られ、只實在者が現實在の實在仕方をする時にのみ、實在了解は實在者として可能であるのである。

五 現實在、被開示性及び眞理

昔から哲學者は眞理を實在と結び附けて居たが、今眞理は正當に實在と根源的聯結を有するものならば、眞理現象は基本本體論的問題研究の圈内に入り込むのである。そうして吾々は是れまでの分析に於て、既に暗に眞理現象を論究して居たのであるが、今や改めて此處に明白に眞理問題を考察することとする。先づ「傳統的眞理概念とその本體論的基礎」を論究し、次に「眞理の根源的現象と傳統的眞理概念の由來」を、終りに「眞理の實在仕方と眞理前定」を論究する。

(a) 傳統的眞理概念とその本體論基礎

今眞理の本質の傳統的把握の特性として特に注目すべきは、眞理の「場所」は言表(判斷) ある

と云ふこと、及び眞理の本質は判斷とその對象との「合致」(die Übereinstimmung)に存する^と云ふことである。然らば先づ此の判斷と對象との「合致」、或は「知と物との充當」(adaequatio intellectus et rei) と云ふ「關係」(“Beziehung”)の基礎は何であるか。此の關係全體の中に何が暗に一緒に設定されて居るか。此の暗に一緒に設定されて居るもの其者は、如何なる本體論的特性

を有するか。

要するに右の合致或は充當の實在仕方を闡明する爲めには、認識すること其のこの實在仕方を闡明することが必要である。そうして夫れに必要な分析は、認識を特性附ける眞理の現象を、同時に洞見せんと努めねばならぬ。然らば如何なる場合に、認識すること其のことに於て、眞理が現象的に明かに現はれるか。それは認識することが眞實であるとして自から證示する場合である。認識することの自己證示が、認識することのその眞理を保證する。かくて此の證示の現象的聯結に於て、合致關係が明かにされねばならない。

壁に背を向けて立つ人が振り返つて、壁上に歪んで掛けられた繪を見て、それは歪んで掛つて居ると云ふ眞實なる言表をなすとする。此の言表は、言表者が振り返つて壁上に歪んで掛けられた繪を知覺することによりて、證示される。然らば此の證示に於て何が證示されるか。此の言表の眞實の保證の意味は何であるか。此處に「認識」又は「認識されたもの」と、壁上の事物との合致の如きものが確定されるか。それは「認識されたもの」と云ふ語の意味するものが、現象的に如何に解釋されるかに従ふて、然り又否かと答へらる可きである。若し言表者が繪を知覺せず、只「表象する」だけで判斷するならば、彼は何物に關係して居るか。表象にであるか。

此處に表象と云ふは、心理的過程としての表象作用を意味す可くは、彼は確かに表象に關係して居るのでない。彼は又表象されたもの（それによりて壁上の現實なる事物の心像が意味されて居る以上）の意味にて、表象に關係して居るでもない。寧ろ「只表象するだけ」の言表が、其の最も固有意味に於て、壁上の現實なる事物に關係して居るのである。此處に意味されて居るのは此の事であつて、其の他の何事でもない。そうして只表象するだけの言表と云ふことに於て、意味されると云はれる他の何物かを

此處に挿し入れる總ての解釋は、就て言表されるものゝ現象的事態を曲けるのである。言表は實在する事物其者に對する一の實在である。然らば知覺によりて何が證示されるか。それは言表に於て意味されたものは、實在者其者であると云ふことに外ならない。そうして言表の眞實を保證するものは、言表されたものに對する言表する實在は、それが關係する實在者の表示であることと云ふこと、それはそれが對する實在者を露はにすると云ふことである。つまり言表の露はにすると云ふことが證示されるのである。此の際認識することは證示の達成に於て、只實在者其者にのみ關係して居るのである。眞實性の保證は云はゞ其の實在者其者に於て行はれる。そうして其の實在者其者は、それがそれ自身に於てあるが如くに自から現はれる、即ちそれが實在するがまゝに言表に於て表示され、露はにされる如くに、その自己性或は同一性に於て實在することを、自から現はすのである。此處に表象が相互の間に比較されるのでも、亦現實なる事物との關係に於て比較されるのでもない。又認識することゝ對象との一の合致、或は心的なるものと物的なものとの一の合致、更に「意識諸内容」相互間の一の合致が證示されるのでない。此處に證示されるのは、只實在者其者の露はにされること、如何にそれが露はにされて居るか云ふことである。そうして此の證示は言表されたるもの、即ち實在者其者である處のものが、同一者として自から現はれると云ふことに於て確證される。要するに言表の眞實性の確證とは、實在者がその同一性に於て自から現はれると云ふことを意味するのである。確證は實在者の自己提示に基いて行はれる。それは只、言表し自から確證する認識が、その本體論的意味に於ては、現實なる實在者其者に對する一の露はにする實在であるに於てのみ、可能であるのである。

言表が眞實であるとは、それは實在者をそれ自身に於て露はにすることを意味する。言表は實在者をその露はにされて居ることゝ於て、言表し、表示し、「見せさせる」のである。言表の眞實であること（眞理）は、露はにすることゝあるとして了解されねばならぬ。かくて眞理は決して、一の實在者（主觀）と他の實在者（客觀）との同化と云ふ意味での、認識することゝ對象との一の合致と云ふ構造を有するのではない。

然るに眞實であることは、露はにすることであると云ふ意味に於ては、本體論的には只世界内在に基いてのみ可能である。かくて吾々が現實在の基本組織として認識した此の世界内在と云ふ現象は、眞理の根源的現象の基礎である。そうして此の事は今

一層深く探究されねばならぬ。

(b) 真理の根源的現象と傳統的真理概念の由來

露はにされること及び露はにすること、としての真理の概念は、既に希臘の哲學者の抱いて居たものであるが、吾々が之を承認するのは、單にかゝる歴史的理由に基くだけでなく、つまり此の真理概念は吾人が先づ第一に「眞實」と稱するを常とする處の、現實在の諸態度の分析から、自から生長するものであるからである。

眞實であることは、露はにすることであるとして、現實在の一の實在様相である。そうして此の露はにすること其のことを可能ならしめるものは、必然的に一層根源的なる意味に於て、「眞實」と稱せられねばならぬ。かくて露はにすること其のこの理論存在の本體論的諸基礎が、始めて真理の最根源的現象を示すのである。

露はにすることは世界内在の一の實在様相にして、見廻して或は滯留しつゝ見つめて配慮することが、世界内的實在者を露はにし、そうして世界内的實在者は露はにされたるものとなる。是れは第二義に於ける「眞實」である。之れに對して現實在は第一義的に「眞實」で、即ち露はにすることである。第二義に於ける真理は、露はにすることを意味するのではなく、露はにされることを意味する。

然るにさきに成就せる、世界の世界性及び世界内的實在者の分析によれば、世界内的實在者の露はにされることは、世界の被開示性に基づいて居る。併し被開示性は現實在の基本仕方である。被開示性は具情在性、了解すること及び語ることによりて構

成され、同等根源的に世界、内在及び自己に當てはまる。世界内的實在者に於ける實在としての、自己潜在（既に一の世界内に在ること）としての關心の構造は、それ自身の中に被開示性を含有する。そうして被開示性と共に又、それによりて露はにされることが存在する。されば吾人は現實在の被開示性を以て、始めて真理の最根源的現象に到達するのである。さきに「其所」の理論存在的構造に關して、又「其所」の日常的實在に關して表示されたことは、つまり真理の最根源的現象として妥當するものである。

現實在は本質的にその被開示性にして、開示されたるものとして開示し、露はにするものである以上、それは本質的に「眞實」である。要するに現實在は「眞理に於て」(“in der Wahrheit”)あるのである。そうして此の言表或は命題は本體論的意味を有するものにして、それは現實在は本體的に常に「一切の眞理の中に」導入されると云ふことを意味するのでなく、その最固有の實在の被開示性が、その理論存在的組織に屬することを意味するのである。然るに現實在は本質的に墮落するが故に、その實在組織に従ふて、「非眞理」(die Unwahrheit)に於てあるのである。

此の「非眞理」と云ふ語は墮落と云ふ語と同じく本體論的に用ひられて居るので、本體的に消極的な評價を全然含んで居ない。被閉鎖性及び被覆性は、現實在に本質的に屬するものである。「現實在は眞理に於てある」と云ふ命題の完全なる理論存在的本體論的意味は、同等根源的に「現實在は非眞理に於てある」ことを意味するのである。現實在は只開示されて居る以上に於て、閉鎖されるので、又現實在によりて既に世界内的實在者が露はにされて居る以上に於て、世界内的實在

者は可能的なる、世界內的に遭遇するものとして、覆はれ（隠くされ）又は佯装されるのである。そうして世界內在は真理及び非真理によりて規定されて居ると云ふことに對する理論存在の本體論的條件は、つまり吾々がさきに「投入されたる設計」(der geworfene Entwurf)と稱せる現實在の實在組織に存する。然るにそれは關心の構造の一構成素であるのである。

吾々は以上述べしが如くに、真理の現象の理論存在の本體論的解釋によりて、(1) 真理とは最根源の意味に於ては現實在の被開示性にして、そうして世界內的實在者の露はにされることはそれに屬すること、及び(2) 現實在は同等根源的に真理及び非真理に於てあることを明かにしたが、今此等の命題に従ふて、合致として了解されて居る真理の傳統的概念の由來が、闡明し得られるのである。ハイデッガー氏はそれより傳統的真理概念の由來を、同氏自身の真理概念からして巧妙に論述して居るのであるが、紙面の都合上此處では其の論述を省いて置く。

(c) 真理の實在仕方及び真理前定

上に述べし處によりて明かなる如く、真理はその最根源の意味に解されるに於ては、現實在の基本組織に屬するので、真理と云ふ語は一の理論存在なるものを意味する。そうしてそれによりて既に真理の實在仕方、及び「真理はある」と云ふ前定の必然性の意味に關する問題の答解は、大體上指示されて居るのであるが、尙ほ改めて此の問題を詳論する。

夫れ現實在は被開示性によりて構成されるものとして、本質的に真理に於てある。被開示性は現實在の一の本質的實在仕方

ある。眞理は只現實がある以上又ある限り、ある (essent) のである。實在者は只一般的に現實がある時にのみ、又ある限り、露はにされ、開示されて居る。ニュートンの法則、矛盾の原則、各眞理は一般に、只現實がある限り眞實である。現實在が一般的になりし前には、又現實在が一般に最早なくなるであらう後には、如何なる眞理もなかつたし、又ないであらう。是れかゝる場合には、被開示性、露はにすること、及び露はにされることとしての眞理は、あり得ないからである。ニュートンの法則が発見され或は露はにされなかつた前には、それは「眞實」でなかつた。併しそれからして、ニュートンの法則は虚妄であつたと云ふことにならない。又其の法則は、本體的に最早「露はにされること」がなくなつた時には、虚妄となるであらうと云ふことにはならない。且つ右の如くに「制限」することに於て、「眞理」の眞實であることは毫も減損されない。

ニュートンの法則は彼の前には眞實でも亦虚妄でもなかつた、又それが露はにしつゝ表示する實在者は、以前にはなかつたと云ふことを意味し得ない。其の法則はニュートンによりて眞實となり、其の法則を以て、現實在に對して實在者はそれ自身に於て接近し得られるものとなつた。そうして實在者の露はにされることを以て、まさしく現實在は既に前にあつた實在者として自から現はれる。されば露はにすると云ふことが即ち、「眞理」の實在仕方である。

「永久な眞理」があると云ふことは一切の永久に於て現實在があつた又あるであらうと云ふ證明が得られた時に、始めて充分に確證されるであらう。そうして此の證明が得られない以上は、右の命題は一の空想的主張たるに止まるので、それが哲學者によりて一般に「信じ」られて居ると云ふことによりて、吾々はそれに正當性を認めることが出来ない。

一切の眞理は、その本質的な現實在的實在仕方に准じて、現實在の實在と關係するもの、或はそれと相對的なものである。

然らば此の關係性或は相對性は、一切の眞理は「主觀的」なものであると云ふまでの意味を有するのであるか。吾人若し「主觀的」とは「主觀の任意に於て定められる」と云ふことを意味すると解釋するに於ては、確かにそうでない。是れ眞にはすることはそれの最固有の意味に従ふて、言表を「主觀的」の任意から脱却させ、眞にはする現實在を、實在者其者の前に持ち出すからである。そうして只「眞理」は眞にはすることとして、現實在の一の實在仕方であるが故にのみ、眞理は主觀の任意から脱却し得るのである。又眞理の「普遍妥當性」も只、現實在は實在者をそれ自身に於て眞にはし解釋し得ると云ふことにのみ、根柢を有するのである。只右の如くであるが故にのみ、此の實在者は可能的なる各言表即ちその表示を、それ自身に結び附け得るのである。正當に了解されたる眞理は、それは本體的には只「主觀」に於てのみ可能であり、主觀の實在と生死を共にすると云ふことによつて、少しも傷害されない。

今眞理の理論存在的に理解されたる實在仕方からして、又眞理前定の意味が了解される。何故に吾人は眞理はあることを前定せねばならぬか。「前定する」とは何を意味するか。此の「ならぬ」及び「吾人」は何を意味するか。「眞理はある」とは何を云ふか。「吾人」は「吾人」が現實在の實在仕方にてありつゝ、「眞理に於て」あるが故に、眞理を前定するのである。かくて吾人は眞理を、吾人の「外」及び「上」にある或物として前定するのでない。嚴密に云はゞ吾人は「眞理」を前定するのではないので、吾人が或物を「前定」する様にあり得ることを、本體論的に一般的に可能ならしめるものが、即ち眞理である。眞理は前定の如きものを、始めて可能ならしめるのである。

前定するとは何を意味するか。是れ他の一實在者の實在の基礎として、或物を了解することを意味するのである。そうしてそれの實在聯絡に於ける實在者のかゝる了解は、只現實在の被開示性即ち眞にはすることに基いてのみ可能である。されば「眞理」を前定するとはつまり、「爲めに」現實在がある處の或物として、眞理を了解することを意味するのである。然るに現實在は、關

心としての實在組織中に含まれて居る如く、自から豫在するのである。現實在はそれ自身の實在に於て、最固有の實在可能に關係する實在者である。そうして被開示性及び露はにすることは、世界内在としての現實在の實在及び實在可能に、本質的に屬する。現實在はそれの世界内在可能、即ち世界内の實在者の見廻はして露はにする配慮に關係する。かくて最根源的「前定すること」は、關心としての現實在の實在組織、自己豫在の中に含まれて居る。此の自己前定することは、現實在の實在に屬するが故に、「吾人」は又「吾人」を、被開示性によりて規定されて居るとして、前定せねばならないのである。現實在の實在中に存する此の「前定すること」は、非現實在的實在者に關係するものでなく、只現實在それ自身にのみ關係するものである。前定されたる真理、つまりその實在が依て以て規定される可き「ある」(das "es gibt")は、現實在自身の實在仕方、臨ふて實在意味を有する。真理前定は「吾人」の實在と一緒に「爲されて居るが故に、吾人は真理前定を「爲さねば」ならないのである。

要するに真理の實在は、現實在と根源的聯結に於て存立する。そうして只現實在は被開示性即ち了解することによりて構成されて居るとしてあるが故にのみ、一般的に實在の如きものが了解し得られ、實在了解が可能であるのである。只真理がある以上にのみ實在(實在者でない)が「ある」(es gibt)。そうして只現實在がある以上及び限りに於てのみ、真理がある。實在と真理とは同等根源的に「ある」("sind")。と云ふはつまり左の事を意味する。即ち實在はそれが一切の實在者から區別される可き處に「あり」、實在の意味及び實在了解の意義が一般的に解明されたる時に、始めて具體的に問はれ得ると云ふことである。又其の時に始めて根源的に、實在、その諸可能性及び諸變化の一の學の概念に屬する處のものが、解明される可きである。

却説是れまでに達成されたる現實在の基本分析に依つては、實在の意味の問題の答解は、まだ與へられて居ないので、それは只此の問題の精練を準備したゞけである。要するに是れまで論述せる處によりて、結局關心の現象が究明され、それによりてそ

れの實在には實在了解が屬する處の實在者、即ち現實在の實在組織が明かにされ、そうしてそれと同時に現實在の實在は、非現實在的實在者を特性附ける實在諸様相(直近在性、現存性、現實性)に對して限定され、又了解すること其のことが闡明され、それと同時に實在解釋が了解し解釋或は啓示する方法の組織的洞見が確保されたわけである。

然るに關心を以て現實在の最根源的實在組織が獲得されたと云はる可くは、之れに基いて又、關心の中に存する實在了解は概念に濟らされねばならぬ(理解されねばならぬ)、即ち實在の意味が限定されねばならぬ。併し關心の現象を以て、現實在の最根源的な理論存在の本體論的組織は、果して開示されて居るか。關心の現象中に存する構造多様性は、事實的現實在の實在の最根源的全體性を與へるか。是れまでの研究は一般的に現實在を全體として究明したか。

ハイデッカー氏は右に述べし質問を以て、同氏が實在問題の精練の第一の任務、即ち同氏の著「實在と時間」の第一部となすもの、「時間性に基づける現實在の解釋、及び實在問題の先驗的視界としての時間の解明」の第一篇「現實在の準備的基本分析」を結び、それより第二篇「現實在と時間性」に進み、現實在の理論存在性の根源的本體論的基礎として、時間性を論究して居るのであるが、それによれば時間性は關心の本體論的意味であるのである。されば同氏の關心論を充分に了解する爲めには、吾人は更に同氏の時間性論を考究せねばならないのであるが、最早紙面はない故、本稿は現實在の實在としての關心に關する同氏の説を述べるだけに止める。そうして余は是れより先づ社會學上に於ける關心論の發達を論述し、次に其の批判的考究に基いて、余が是れまでに立てたる關心論の一般を述べ、終りにハイデッカー氏の關心論によりて、余は余の關心論を發展させる爲めに何を學んだかを論述することとする。尙ほ其の際にハイデッカー氏の時間性論を述べて、結局同氏が時間性を關心の本體論的意味と見る主旨を、批判的に考察したいと思ふ。